

令和6年度文京区障害者地域自立支援協議会

第4回子ども支援専門部会 次第

日時 令和6年12月2日(月)午後1時

会場 文京シビックセンター4階

シルバーセンター会議室B

1 開会

2 議題

(1)令和6年度子ども支援専門部会振り返り 【資料第1号】

(2)ケース検討会の実施について

(3)全体会の発表について

3 その他

【参考資料】

・令和6年度 文京区障害者地域自立支援協議会子ども支援専門部会員名簿

令和6年度 文京区障害者地域自立支援協議会子ども支援専門部会員名簿

No.	氏名	所属等	区分
1	高山 直樹	東洋大学福祉社会デザイン学部社会福祉学科教授	学識経験者
2	荻野 美佐子	上智大学総合人間科学部心理学科名誉教授	学識経験者
3	内海 裕美	小石川医師会会長（吉村小児科院長）	医師
4	向井 崇	放課後等デイサービスカリタス翼 管理者兼児童発達支援管理責任者	事業所等職員
5	勝間田 万喜	富坂子どもの家 管理者兼児童発達支援管理責任者	事業所等職員
6	高山 陽介	わでかくらぶ代表	事業所等職員
7	内田 千皓	相談支援事業所やえ相談支援専門員	事業所等職員
8	町田 寛子	都立王子特別支援学校 特別支援教育コーディネーター	都教員
9	鵜沼 苗子	久堅保育園長	区職員
10	川崎 洋子	子ども家庭支援センター児童相談係長	区職員
11	加藤 たか子	保健サービスセンター保健指導係長	区職員
12	高橋 拓也	教育指導課統括指導主事	都教員（区費負担指導主事）
13	井上 アヤ乃	教育指導課特別支援教育担当主査	区職員
14	小野寺 素子	教育センター総合相談係長	区職員

事務局	文京区障害福祉課障害福祉係
-----	---------------

障害者地域自立支援協議会 子ども支援専門部会

令和 6 年度振り返り
令和 7 年度実施案について

令和 6 年度子ども支援専門部会

令和 5 年度の議論から、3 つの課題が抽出された。

- ① **支援者の縦横連携**→子どもを中心とした顔の見える関係の構築。
- ② **保護者支援**→支援の不足、保護者への働きかけ、敷居の低い相談の場。
- ③ **情報共有**→保護者の同意を得たうえで個人情報を含む情報の共有。

令和 6 年度は、① **顔の見える関係づくり**に向けて、研修会の実施を企画。

第 1 回 研修会の準備

第 2 回 研修会の実施

第 3 回 研修会の振り返り・課題抽出、次年度以降の検討

第 4 回 令和 6 年度総括、令和 7 年度実施方針について意見交換

研修会で分かった切れ目と課題



※令和5年度第1回子ども支援専門部会資料より抜粋、加工

研修会の実施 グループワークで出た「切れ目」

「縦の切れ目」

1. 幼児期から小学校への切れ目

保育園・幼稚園から小学校への移行で情報共有が不十分。障害特性の認識や療育の途切れが問題。

2. 小中高等学校間の切れ目

学年ごとの引き継ぎが不足。中学校・高校への進学時に情報が途切れる。

3. 18歳の支援の切れ目

18歳を迎えると支援サービスが変更され、連携が不十分になる。そのために、もっと早期から繋がる必要。

4. 成人後の社会適応における切れ目

グレーゾーンのケースで支援者と繋がり難く、社会適応が難しくなる。成人後の居場所の問題。65歳の切れ目。

「横の切れ目」

1. 教育・福祉（相談支援・児発・放デイ）・医療機関同士の切れ目

学校・医療・福祉機関間での連携不足、アセスメント方法の違いにより支援に一貫性がもてない。

2. 保護者支援における切れ目

保護者同士の繋がりが少ない。保護者の理解不足が支援の遅れに繋がる。保護者の意見や思いが優先される。

3. 情報の切れ目

制度の理解不足や相談のハードル、情報の引き継ぎや支援者間の繋がりが途切れやすい問題がある。

4. 保護者の気持ちと子どもの気持ちの切れ目

保護者の意見が優先される一方で、子どもの気持ちや意見が反映されにくく、支援の質が保護者の理解や経済状況に左右されがち。

研修会の実施 グループワークで出た「資源・強み」

1. 福祉・相談支援の資源

相談支援、総合相談、基幹、拠点など。

2. 学校・教育の資源

保幼小中連携、SC・SW、学校生活支援シート、校内委員会、ケース会議、部会・連絡会。

3. 地域資源・居場所の資源

子ども食堂、B-Labo、こまじいの家など。

4. 保健・医療の資源

就学前検診での情報共有、小児科に相談前相談が集まり地域病院と連携が可能。

5. 家庭や保護者に関する資源

教育熱心、経済力あり、子育てサロン活用。

6. その他の人的資源

各分野の専門家が充実。

なぜ、これだけ資源があるのに、切れ目があるのか？



「切れ目」を「繋ぎ目」にする視点は？

研修会の実施 グループワークで出た「知恵・提案」から

1. 顔の見える関係づくり

学校、放課後デイ、福祉・医療機関同士が顔を合わせ、信頼関係を築くことで、円滑な情報共有が可能。

2. キーパーソンづくり

各機関をつなぐキーパーソンが長期的視点での情報管理と引き継ぎを担い、子どもと家庭を一貫してサポート。

3. 個人情報考慮した情報共有の仕組みづくり

個人情報保護に配慮しつつ親の同意を得た上で必要な情報を統一的に管理することで、各機関で子どものニーズに即したサポートが可能。

4. 専門性の向上と人材育成

研修で専門知識を深め、各機関をつなぐ人材を育成し、持続的なサポート体制を確立。

5. 医療の活用

教育・福祉と医療機関の連携強化と情報共有の仕組みを構築。医療的ケアが必要な子どもへのサポートを充実。

6. 保護者支援

保護者同士や学校・放課後デイとの交流・相談機会を増やし、長期的な支援の方向性を共に考える場を提供。

第3回子ども支援専門部会での研修会の振り返りから

1. 地域課題の抽出と解決策の明確化

→生きた事例検討をして、顔の見える関係を作り、そこから地域課題を抽出する。好事例を共有することで、課題ではなく「こういうことが大切」ということが導き出される。

2. 顔の見える関係の構築

→顔の見える関係を作り、支援の結束点を形成するために、事例検討を行うことが有効。支援者間での連携を強化し、切れ目のない支援を実現することを目指す。

3. 共通言語の理解と深化

→「福祉の言葉が分からない」という現場の声を反映し、言葉の共通言語を作り、理解を深める場を提供する。これにより、関係者間の円滑な連携が期待できる。



課題抽出の切り口として、ケース検討会の実施

令和7年度ケース検討会の実施

目的

- 地域課題の明確化と解決策の共有
- 関係者同士の顔の見える関係の強化
- 支援の質向上と実践的な学びの場の提供

第1回 6月中旬

子ども支援専門部会内での議論

- 第2回に向けた事例の深堀
- 必要に応じて事例の加工

第2回 7月下旬

教育・福祉の連携を目的とした研修会

- 事例検討
- 分野を超えた意見交換
- 共通理解の促進



同じ事例を用いて議論

進行スケジュール案（3時間）

1. 開会と趣旨説明（10分）

主催者からの挨拶と事例検討会の目的、進行の説明

2. 事例の発表（20分×2事例）

- ・事例1：学齢期のケース
- ・事例2：成人期への移行ケース

3. グループディスカッション（60分）

事例を基にして、グループに分かれディスカッションを行う。

- ・アイスブレイク：顔の見える関係を構築する。
- ・地域課題の抽出：事例における課題を自分たちの現場に照らし合わせて考え、地域課題を抽出する。
- ・改善策・アイデアの創出：自分たちの現場で実践できそうな具体策や、新たな発想を出し合う。

休憩・名刺交換（20分）

4. グループ発表と全体ディスカッション（40分）

各グループの代表が話し合った内容を発表し、会場全体で意見交換を行います。全体ディスカッションを通して、具体的な連携のアプローチについて更に理解を深めます。

5. 学識経験者からまとめと閉会の挨拶（10分）

全体のまとめを学識経験者から。閉会。

6. アンケート記入

第4回子ども支援専門部会議題

- 令和7年度ケース検討会の事例について
 - 学齢期のケース
 - 成人期の移行ケース
- 自立支援協議会全体会での発表について
 - 令和6年度の子ども部会として、どのようなことを訴えたいか？
 - ⇒「子ども自身を結末点としたネットワーク」を目指して
 - 顔の見える関係づくり
 - キーパーソンづくり
 - 個人情報と考慮した情報共有の仕組みづくり
 - 専門性の向上と人材育成
 - 医療の活用
 - 保護者支援
 - ⇒成人期の支援機関とも連携を深め、将来から逆算する